

巻頭言

一時、医療界を席卷した EBM（エビデンスに基づく医療）も定着・標準化し、ガイドラインに準拠した薬物治療の原則も医療界に広く受け入れられるようになった。しかし、その一方で、無作為化比較試験（RCT）の情報を集積したエビデンスやガイドラインの情報をいかにして個別患者に適応するかの能力養成の重要性が認識されている。さらに、そもそも RCT の対象とならない特殊な臓器障害を有する患者群や小児や妊婦と言う医薬品の効果や副作用が平均的な成人患者と同列に論じられない患者群における薬物治療をどのように最適化するかの議論は等閑視されている。

今こそ医薬品の効果は「薬物の曝露量と時間経過および標的組織・臓器の感受性により決定される」というセントラルドグマを用いて個別患者治療の最適化を再評価すべき時である。その主体は臨床薬理・薬学の徒がなさねばならない。アプライド・セラピューティクス（実践薬物治療）学会は一人一人の患者の薬物治療を、科学的な RCT の情報を尊重しつつ、患者の価値観も尊重してやり直しがきかない個別患者の薬物治療を集学的な知識を用いてベッドサイドで実践する事を目指す薬剤師と医師が集まり結成した集学的な学術集団である。

学会活動の成果の公表は学術大会における討論と学会誌における情報発信が根幹である。アプライド・セラピューティクス誌は、発足以来歴史が浅い学術雑誌ではあるが、本号においても上記のような学会設立の観点から意欲的な論文が掲載されている。冊子体から電子ジャーナルの形態に移行し、投稿論文も掲載決定後に速やかに公開されるようになった。謙虚にこれまでの本誌の論文を振り替えれば、中には未だ意余りて言葉足らずの感があるものもあつたかもしれない。しかし、本誌のように実践的な薬物治療を科学することをミッションに掲げた学術雑誌は国内外を問わず類例がほとんどない。今後、益々学会員が積極的に投稿されることを通して学会活動を盛り立てて行こうではないか。

明治薬科大学
副学長 薬物治療学 教授
越前 宏俊